

## 「主 に あ っ て」

詩 篇 第27篇1～4節  
ローマ人への手紙 第16章1節～16節

説 教 岡村 恒牧師

主にある兄弟姉妹一人一人によろしく、私の心からの挨拶を伝えてほしい。ローマ人への手紙の最後で26人のローマ教会の人々の名前を挙げて語ります。当時ローマは世界の中心で各地から集まった人々が生活していました。使徒パウロはイエス・キリストの福音を述べ伝えようと決断しています。この手紙も自分がやがて命がけで行くことになるローマの教会に、あらかじめ福音の核心部分を凝縮する様にして送り届けたものです。

26人の中には多くの女性や奴隷につけられた名前が登場します。ローマ人、ユダヤ人、ギリシャ人、地中海地域各地の出身者の名前が入っています。悲しみ、迫害、怒りの中で主イエスに出会った人々です。パウロは一人一人を明確に思い出しながら名前を言います。

代々の教会は、このリストの中に自分の名前を発見してきました。境遇が似ているとか、修飾の言葉が自分に当てはまるという話ではありません。元の言葉では、今日の箇所「主にあって」という言葉が6回、「キリストにあって」という言葉も5回登場します。この人は主イエスによって神と結びついている人だ。そういう言葉が繰り返し使われるのです。ですから代々の教会は、これらの名前を目にしながらか、慰めと励ましを受けたのです。

ローマ人への手紙全体が「主にあって」という言葉に集中するようにして語ってきました。私たちが地上を歩み、様々な悲しみや怒りを背負い、さらに死後、神の前に立たねばならない。その時どうやって神と向かい合ったら良いのか。そういう不安を抱える人々に、パウロははっきり語ります。神を信じ、主イエスを信じればよい。この一点において赦され救われるのだ、と。

当時の教会の中に、人が救われるのは信仰によるけども、他にも必要な事があるのではないかと言う論争がありました。神に対してどれ程貢献するか。そういう考え方が繰り返し教会に入ってきました。今日でもそうです。そこで、ローマ人への手紙は研ぎ澄まされた言葉を用いて、信仰以外の掟は救いの条件ではない事を語ってきたのです。

一人の人生を振り返って文章に書いたとき、最後に「主にあって」という言葉を入れて読む事ができる、ということが大事なのです。これを欠くならばその前にどれほど豊かな人生が描

かれてもそれは無益だと、聖書は言い切ります。

私たちは主イエスに結び付けられて生きるように招かれた者です。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マタイによる福音書 27章46節）主イエスは私たちが叫ぶはずの絶望を叫んで下さいました。私たちが神の前で、そう叫ぶことがないためです。

ある人は死の床で洗礼を受け、それでもなお神に結びつけられたキリストの者として眠りにつきます。ある方は若い日に洗礼を受け、教会に仕え、身も魂も神に捧げて生きます。どちらが得た福音も、救いも同じなのです。

「主にあって選ばれたルポスト、彼の母とに、よろしく。彼の母は、わたしの母でもある。」（ローマ人への手紙 16章13節）主イエスが十字架を背負ってゴルゴタへの道を歩まれた時、あまりの重みに倒れました。「そこへ、アレキサンデルとルポストとの父シモンというクレネ人が、郊外からきて通りかかったので、人々はイエスの十字架を無理に負わせた。」（マルコによる福音書 15章21節）シモンの子供たちは初代教会でよく知られていたようです。シモンにとって人生最大の屈辱の日が、家族の救いの始まりになりました。

聖書全巻は、神が私たちが救いに入れて下さる約束を記しています。誰でも、招きに応じて、主イエスは私の救い主だと信じるなら、その人には主にあって生きる道が開かれていきます。

キリスト教会は主にあって生きる人の集いです。共に祈り、神の約束を聞き、主の再臨を待ち望んで歩みます。私たちが今ここに居るのは、あの日、主イエスが十字架の上で私たちの為に叫んで下さったからです。神が主イエスの墓を空にして、死がもはや私たちが滅ぼす敵でない事を明らかにして下さいました。

主イエスを信じて生きる、それがどれほど希望に満ちた事であるかを受け止めて、主にあって生きたいと願い、祈り始めて下さい。既に信仰を得た者は主にあって生きている、ここに名を挙げられた人達と同じ場所に身を置いている事を心に刻みつけて主を讃美して下さい。私たちは今日ここから、もう一度主にあって生きる人生に歩み出しましょう。

（記 説教要約奉仕者）